

東京日々新聞

九百四十四號



世ふ二度愕然といふ事往々あるも要ふ
 二度びつくりの
 活あり大阪仙坡
 多し商人の手代
 東京の取引先より
 千四
 餘りの金
 と受取り
 其帰途伏
 見の舟よ
 乗後一人あそ
 仕立船も匠費ありといひ人か車と雇ひ徹夜大
 坂に陸を急ぐせし何所よりひた大坂の程遠く
 ら孤村と過し一深夜三時をき月山の端に隠
 る物のあるも分らず車夫も此時提灯の輪燭を
 燈久しき折柄突如大の男長刀を帯て
 小澤より頭を出て所持する金千四渡
 手代は面を根も合せて
 震ひ居るのと伺ふ
 然るも車夫進り
 て言ふ斯
 る上は是非
 事小時間斯くあらずならぬ力多し大坂へ歸り直ち主家へ
 戻り難く安家へ歸りて事聞かんとせし府邸より仙坡の主家へ車夫時の
 謀事とて手代の難を救ひしと池田の主人に却て手代の宿を問ふ主僕
 府邸より金を受とり學く車夫も謝したるを
 山々亭有人記

金足屋

渡辺彫栄